

人生ハンド仏句

第57号

H.18.12.1
(毎月1日発行)

お題目の神秘

住職 谷川寛俊

財政経済の評論誌『経済界』の主幹の佐藤正忠氏は、ゴルフ場で突如として脳卒中に襲われました。昭和五十四年のことでした。救急車で病院に運ばれ精密検査をしたところ、右の脳の血管が切れた為の脳内出血でした。意識不明で生死の境をさまよう、危険な状態でした。

佐藤氏は、一ヶ月にわたる主治医の懸命な治療が奏効して死の危機だけはようやく脱することができましたが、左半身が全く麻痺して動かなくなりました。

そこで医師の勧めにより、リハビリに専念することとなりました

が、左手と左足が何としても動きません。

また、写経にも専念しました。佐藤氏の家の宗旨は念仏です。病室では早朝五時に起きて念仏「南無阿彌陀仏」を唱え、不自由な半身でその文字を書く毎日が続きました。

そのような折、静養のために伊豆の畑毛温泉に行った時の事です。この温泉は体温より低めで、長時間ゆつたりとつかっている事ができます。ある朝早く、ひとり温泉につかっていますと、突然「南無妙法蓮華經」というお題目の音が、体内からほとばしり出てくるように口から出てきたではありませんか。生まれて初めての経験です。後から後から「南無妙法蓮華經」が腹の底から湧き上がり口をついて出てきたのです。

その時の様子を、「夢中になって三十分近くお題目を唱えていた。考えなくてもみないことであつた。私の血液

編集・発行
玉蓮山 真成 寺
編集部
TEL・FAX (0765)22-2268
メールアドレス
kokorochanthk@ybb.ne.jp
ホームページアドレス
<http://www.geocities.jp/siniyoujitoiyama108/>

の中に法華經の血が流れていたとしか考えられない。輪廻転生とはいうけれど、私の過去世の一人が熱烈な法華經の信仰者であつたのかも知れない。その血が騒いだのであろう。」と、佐藤氏は感激の涙をぬぐいながら告白しています。

お題目を唱えたその気分の爽やかさは、たとえようもなく全身に新しい力がみなぎり、あふれる喜びを覚ええました。お題目の信仰こそ、真実の道なることを身をもって感得しました。奇跡的な生還です。その後の病状は少しずつではあるが回復しているとの事です。

日蓮大聖人は「今、法華經に縁があり、お題目を唱えている人は、過去の世でも法華經を強く信仰してきた人である。その人は又、未来の世でも法華經に巡り会うよう約束されている。」と、仰せになられています。

これを仏縁といい、まさしくその昔お釈迦さまや日蓮大聖人も親しくお会いした魂が、輪廻転生を繰り返しているのです。
さあ、あなたも真のお題目を唱え持(たま)ち、家族や周囲に伝えていきましょう。
明年も素晴らしい年でありますよう、そして更なる信行増進にお励み下さることを心から祈念申し上げます。

生かされているのだから 生かそう我がいのち